

ローズグラス新品種「ハツナツ」

中川 仁・清水知宏・佐藤博保 (九州農業試験場)

Hitoshi NAKAGAWA, Norihiro SHIMIZU and Hiroyasu SATO : A New Rhodesgrass Cultivar "Hatsunatsu"

ローズグラスは、乾草生産が容易で耐湿性が高いことから暖地型牧草の中では最も広く栽培されている。ところが、原産地がアフリカで元来永年生であるにもかかわらず、日本では沖縄を除いて1年生栽培が行われている。このため、海外から輸入した品種系統は必ずしも1年生栽培法に適しているとはいえなかった。そこで、初期生育が早く、5月～10月の栽培期間で良質多収の品種の育成が望まれていた。

1. 来歴と育成経過

1979年 農業技術研究所種子貯蔵管理室保存の22品種・系統、草地試験場経由でアフリカより導入した18系統及び対照としての市販品種を加え合計42品種・系統の染色体数をはじめとする諸特性を調査し、2倍体で出穂期がカタンボラより早く、生育の旺盛な11系統を選定した。

1980年 この11系統各300個体計3300個体を苗床で育て、各系統の中で初期生育の良い23個体計253個体を圃場に移植した。その中から直立型で葉幅が広く、収量の高い43個体を選抜し、自然条件下で相互交配を行って43系統の種子を得た。

1981年 この43系統の後代検定を行うと共に各系統につき20個体計860個体を個体植にし、後代検定で初期生育が良好で収量の高かった9母系につき、高収の各2個体を選抜し種子を得た。

1982年 この9母系について後代検定を行うと共に各系統40個体計360個体を畑に展開し、高収量を示す5母系から16個体を選抜、多交配をし、種子を混合して「九州1号」とした。

1984年以降諸特性調査、地域適応性検定を行い、1987年農林1号として登録され「ハツナツ」と命名された。

2. 特性の概要

染色体数はカタンボラと同じ、 $2n=$ の2倍体である。主な特性の概要は第1表に示した。出穂は、カタンボラよりも2週間以上早い早生である。草型は、ほふく性の高いカタンボラよりも明らかに立型である。ストロンは、カタンボラよりも太いが、ストロン数に差はない。穂首の稈径はカタンボラよりもわずかに太いが、基部の稈径は同じである。葉長に差はないが葉幅は広く、4回の刈取時の葉部割合の平均値はカタンボラよりも約6%高い。しかし、飼料成分及び乾物消化率は差が小さい。初期生育が良好で、カタンボラよりも速やかに播種後の草丈が急伸長期に入る。これに反映して、1番刈りの収量がカタンボラより30%程度高い。また、個体の再生力も良い。3回～4回刈りの総収量はカタンボラより約10%高く、

施肥反応はカタンボラよりも敏感で多肥になるほど多収になる。穂長は、カタンボラより約1cm短い、穂数と枝梗数はカタンボラよりも多く、採種上の問題はない。

第1表 ハツナツの主要特性

形質	品 種	ハツナツ	カタンボラ
出穂日(7月1日起算)		41.4	59.7
草型(1=ほふく～5=立)		2.6	1.7
ストロンの太さ(mm, 長径×短径)		15.8	11.9
ストロン数(苗移植後45日)		11.8	11.2
稈長(cm)		150	160
稈径(mm, 穂首)		2.3	2.0
稈径(mm, 基部)		4.3	4.3
葉長(cm)		25.7	24.7
葉幅(cm)		0.72	0.54
再生出穂数/株(9月30日)		174	128
穂長(cm)		10.5	11.5
枝梗数		16.9	12.7
初期草丈(cm, 播種後45日)		72.6	59.9
初期個体重(g, 播種後30日)		1.47	1.26
1番草生草収量(kg/a)*		218	167
再生力(1=良～5=不良)		2.2	3.5
葉部割合(4回刈平均)		66.3	60.6
生草収量(kg/a)*		749	718
乾物収量(kg/a)*		138	129
多年生乾物収量(kg/a)**		670	667

注) *沖縄、鹿児島農試、長崎畜試、滋賀畜試、愛知農総試、九州農試3カ年の平均、**沖縄畜試3カ年の合計

3. 適地及び栽培利用上の留意点

九州以北では既耕地の1年生暖地型牧草として乾草生産及び青刈り給与に適している。特に九州を中心とする火山灰土地帯や干拓地では多収を示し、施肥効果が高い。さらに、南西諸島では草地における多年生牧草としても利用できる。この場合、収量はカタンボラとほとんど差がない。播種時期に早ばつに遭遇すると発芽不良になることがあり、播種後の覆土、鎮圧に特に留意する必要がある。また、初期生育が良いため、梅雨期に伸長しすぎて倒伏を招き、再生不良になることがあるので草丈100cm程度の早刈りが望ましい。耐湿性はかなりあるが、湿潤地での生育はあまり良くない。